

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

## 「思考様式および実践としての現代科学とローカルな諸社会との節合の在り方」2013年度第2回研究会（通算第6回目）

日時：2013年6月22日（土）13:00-19:00

場所：AA研マルチメディアセミナー室（306）

岡部佳世（AA研共同研究員，法政大学）

「空間情報科学の視点から」

近藤和敬（AA研共同研究員，鹿児島大学）

「超越論的なものと問い：内部観測、ベイトソン、パース、ドゥルーズにみる「準 - 実在」

### 「空間情報科学の視点から」

岡部佳世（法政大学）

#### 1. 空間情報活用の術の発展

携帯などを使ってGPSデータを取得し「だれでも、どこでも位置情報を手に入れる」ことが可能となってきた。このような時代がこのように早く到来することを予想できた者は多くはなかつただろう。位置情報を研究対象とする私は、この「だれでも、どこでも位置情報を手に入れる」術が、われわれの思考形態そのものに大きな変革をもたらすに違いないと考えている。この点を巡って、「時間情報」と「空間情報」を対比させながらそれぞれの発展について紹介した。

次の3つの観点から発展を述べた。

- ① 社会共通の参照軸（時間参照系・空間参照系）
- ② 参照軸上のポイント（時点・地点）を知る術
- ③ 情報（時間情報・空間情報）を管理する術

時間については、①の社会共通の参照系であるグレゴリウス暦の普及、②の参照系上の時点を知る術である腕時計の普及、③の時間情報を管理する術であるスケジュール帳の存在など、3つの環境が整っている。世界中の多くの人々がこの「時間情報」を共有・操作し得ている現在の状況は、奇跡の一つではないだろうか。

それに対して空間情報は、①の社会共通の参照系である座標系の存在はヘレニズム期には発見されていた点、②の参照系上の地点を知る術については、経度の取得は緯度にくらべて遅く、18世紀後半になってやっと正確に取得できた点、③の空間情報を管理する術は、現在のところ時間情報管理のスケジュール帳のように扱いやすいものではない点、などについて言及した。さらにこの「空間情報」に関しては、「時間情報」のように日の出日の入・四季に代表される体感的な素地をわれわれは有してはいない。この点が根源

的な相違点であり、空間的思考なる新しい思考形態は、人間の進化の過程にいかにか、うまく組み込まれてゆくことになるのだろうか。

## 2. 私のかかっている研究から

- ・ **Spatial Analysis Along Networks** : ネットワーク上の位置情報分析ツールの開発。
- ・ 最近隣防災施設案内\_渋谷板 : **Google Maps API3** を使用したアプリプログラムの開発。
- ・ 家禽および野鷄の **WIFI** を使用した時空間情報データ取得実験 : タイで行った実験 2 件。

## 3. 最近の話題から

- ・ **Open Street Map** : プロ地理学者からアマチュア地理学者の時代へ。
- ・ **Mobile Mapping** : **GPS** を搭載した飛行機や車で、景観を丸ごとスキャンする。

## 「超越論的なものと問い：内部観測、ベイトソン、パース、ドゥルーズにみる「準 - 実在」

近藤和敬（鹿児島大学法文学部）

近年の人類学において議論されている「存在論的転回」のひとつの議論の源泉となっている **B.ラトゥール**によるアクターネットワーク理論（以下 **ANT**）が前提する真理観を検討することから本発表者は議論をはじめた。それにあたって、ラトゥール自身によって **ANT**の基づく真理観として参照されている **C.S.パース**による真理観および実在概念の規定を確認した。

それによって、第一に、パースの真理および実在に関する議論が、ラトゥールの真理観と実在観の原型になっていることが示された。第二に、この議論の前提に、研究者が最終的に賛同することになる「意見」を形成する「探求」そのものを要請するものとしての「懐疑」がパース自身によって位置づけられていることが示された。この「懐疑」という概念は、「信念」と対をなす心理状態として規定されており、またこの心理状態においてひとは「問題」を提起し、その解決へと誘われるとされる。発表者は、以上のようなパースの議論の問題点として、「問題」が常に「信念」ないしその最終的な安定状態としての「真理」へと解消されるべきものとしてあらかじめ措定されている点を指摘した。

以上の問題点をさらに検討するにあたって、発表者はベイトソンによる「情報」と「コンテクスト」（ベイトソンの意味では、情報の時間的パターンである）に関する議論を参照した。そのなかで、パブロフのイヌをつかったオペラント条件付けについてのベイトソンの解釈と、ベイトソン自身によっておこなわれたイルカの調教に関する実験の報告を介して、ベイトソンの論じる「コンテクスト」の不定さの議論を検討した。そうすることで、先に確認された「問題」なるものの境位が、たんに解消されるべきものとしてあるのではなく、「コンテクスト」の根源的不定さとして（たとえ「コンテクスト」が定まっていると約定されていたとしても）常に回帰するものとして考えられることが示された。

最後に、このような回帰するものとしての「問題」についての存在論を最初に展開した

ものとして、ドゥルーズによる「問題」を中心とした「？ー存在論」を引用し、その可能な解釈を提示した。以上の議論を受けて、「存在論的転回」がプラグマティズムの真理観を参照する ANT の議論の問題点を乗り越え、「実在」をめぐる議論を論じるためには、ドゥルーズが行っている「問題」概念の存在論的検討が必要となるという発表者の考えを提示した。